

南蛮に興味を持ったきっかけは何？

鹿沼市立川上澄生美術館

学芸員 原田 敏行

川上澄生の作品といえば、南蛮をテーマにした作品を思い浮かべる人が多いと思います。実際にその点数は非常に多く、川上にとって大きなテーマであることは間違いないのですが、これまで南蛮に興味を持った直接のきっかけについてはわかっていませんでした。

ところが、「川上澄生の全貌」の図録解説を書き終えたところで、ひとつの新聞記事が見つかりました。それは「ありがとう“南蛮画 50 年”ポルトガル大使が川上老に記念品」（毎日新聞、昭和 42 年 7 月 5 日付）で、長年にわたり南蛮の文化を描き続けた川上に対して、当時のポルトガル大使が記念品を贈った記事です。実はそのなかのインタビュー記事に、なぜ南蛮に興味を持ったのかが描かれています。その部分を抜粋してみます。

「川上さんは東京に住んでいた 18 歳のとき、詩人の故木下杢太郎氏の戯曲「和泉屋染物店」の口絵にあった安土桃山時代の“南蛮人”の風俗に魅せられたのが、きっかけ…」

記事の中で、きっかけは本の口絵だったと述べられており、早速「和泉屋染物店」を調べてみましたが、川上の言う南蛮人の風俗の口絵を確認することはできませんでした。そこで別の本にあたりをつけ、戯曲集「南蛮寺門前」を調べたところ、なんと南蛮人の風俗の口絵が出てきました。インタビュー時点で 72 歳の川上は記憶違いをしていたようです。

大正から昭和初期にかけて、日本では一時の南蛮ブームが起き、その時代の研究を始め、文学や美術の世界でも南蛮に関する作品が多数生まれました。若い頃の川上はそうした各方面での動きに刺激を受け、そうしたなかで手に取った一冊が「南蛮寺門前」だったのでしょう。展覧会には間に合いませんでしたが、川上の南蛮に関する研究が一步進みました。



『南蛮寺門前』箱



『南蛮寺門前』表紙



『南蛮寺門前』口絵